

令和6年度「熊本の学び」研究指定校事業 事業実績報告書

1 研究の内容

授業力向上（○）・道徳教育（ ）・キャリア教育（ ）・特別活動（ ）
カリキュラム・マネジメント（ ）・その他（ ）（内容： ）

2 学校の概要

（単位：人）

プロジェクト校	児童生徒数	教員数	校長名	研究主任名
上天草市立登立小学校	167	15	田崎 正明	五島 秀樹

3 研究主題 子供とつくる「学びのひとりだち」～主体的に学び続ける子供の育成～

4 研究主題設定の理由

（1）社会の要請から

児童が、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるためには、これまでの学校教育の成果の蓄積と課題の改善を生かした学習の質を一層高める授業改善の取組をより一層活性化していくことが必要である。その方途が優れた教育実践による普遍的な視点「主体的・対話的で深い学び」の実現にある。

我々熊本の教職員は、「熊本の学び」の理念のもと、提言「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める」の姿と、学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」の姿とを重ね、その実現に向けた教育活動を展開していくことが求められる。このことから、「熊本の学び推進プラン」の具現化を通して、学習者側から創る学習活動を展開し、その成果検証を繰り返しながら、「児童を『学びの主体』」とする授業を実現していくことが教育活動における必要不可欠な取組であると捉える。

（2）現状と課題から

本校では、「熊本の学び推進プラン」に沿って、主体性に培う教育活動の展開を「すすんで、自分で、自分たちで」をスローガンに、子供たちが主体となった学校生活の実現を目指してきた。その一環として、校内研究においては、主体的な学びの実現、つまり「学びのひとりだち」を掲げ、教師主体の授業から児童主体の授業へと授業観の転換を図り、授業改善に取り組んできた。研究実践の成果として、児童の学習に対する意識は「以前より進んで学んでいる」「学び方選びにより学習がしやすくなっている」などの肯定的傾向が高くなり、熊本県学力・学習状況調査（以下、県学力調査）における正答率の経年比較において向上傾向が見られるなど、「熊本の学び」の実現への一步を踏み出したところである。ただし、個人差等の課題もあり、「誰一人取り残さない学びの保障」という観点からは十分な学力保障が実現できているとは言えない状況がある。この点は、県学力調査における児童質問紙の

項目「学校の授業の予習や復習をしていますか」「勉強するときは、自分で計画を立てていますか」「友達の意見を聞いて新しいことに気づいたり自分の考えが深められたりして、勉強って面白いなと思うことがありますか」等における肯定率が70%程度である結果からも裏付けられる課題でもある。さらに児童の学校生活においては、相手意識の高揚と、自己肯定感・自己有用感の向上が確認できる一方で、不定愁訴の訴えなど、学校生活及び人間関係上の課題を抱える児童もおり、児童個々のレジリエンス力の育成に加え、心理的安全性を確保できる学級づくりの重要性を感じている。

以上の現状を踏まえ、これまでの教育活動の成果を生かすこと、そして、明らかになった課題の改善を図るために、児童一人一人が主体性を発揮しながら、生活及び学習を、自ら高めていく教育活動の展開を通して、教育指導上の課題の解決及び改善を図ることが必要であると考え。具体的には、「自らの目的や力に合わせ、自己の学びを選択し、友だちと共に学びを深化していくことができる姿」、また、「自らが主体となって、より良い生活を目指して進んで行動する姿」の具現化である。今回の研究指定の機会を生かし、これまで以上に、児童一人一人が、自らの個性を発揮できる学校づくりに向けて、機能的組織を構築し、研究推進にあたりたいと考える。

これらのことから、本校が目指す「学びのひとりだち」の実現は、児童を「学びの主体」へと具現することと捉える。また、「主体的に学び続ける力」の育成は、「熊本の学び推進プラン」の実践的検証である。それは「学習指導要領の趣旨を教室へ」という試みであり、社会の要請に応える教育活動である。

5 研究の具体的な取組内容の実際

研究主題の具現化に向けて、授業改善を研究の核として、「児童主体の学習活動の展開の在り方」「個々の学びの成立に向けた指導支援の在り方」を掲げ「柔軟な学習過程による授業構成を行う」こと、「学習活動の個別化を実現する」ことの推進を図ってきた。本年度の主な研究実践は以下の通りである。

(1) 授業づくり

個別最適な学びと協働的な学びが一体となった授業の実現に向けて以下の4つの視点から授業改善に取り組む。

- ①家庭学習と関連した導入段階の工夫改善
- ②自己選択を生かした個別最適な学びを生む課題解決時における指導・支援
- ③少人数による協働的な学びを生む言語活動に係る指導・支援
- ④学び直しのある学習のまとめと振り返りを促進する指導・支援

(2) 単元づくり

児童の単元学習が個々の主体性を培う確かな学びとなるように、以下の視点で、単元ガイダンスとコーディネートを行う。

- ①単元のねらい、単元でつける力、学習内容の的確な把握
- ②単元のゴールへの見通しと単元終末時の自己（児童）のイメージ化
- ③学び方の選択活動の提示とその活用

④単元を通した児童個々の学習成果及び課題の明確化とその活用

(3) 総合的な学習における探究的な学習

探究的な学習を通した児童個々の主体的な学びを創出する総合的な学習の展開を以下の視点で行う。

①教科につながる探究的な学習「数理・言語・芸術等のコース」

②児童の興味関心をもとにした選択によるコース分け

③学びの基礎基本（学びのSDGs）の作成と他教科との関連

(4) 人間関係を調整するプログラムを取り入れた学級経営の充実

安定した学校生活を送る力を育てていくために、以下の3つのプログラムに取り組んでいく。

①人間関係調整力を高める取組（ソーシャルスキルトレーニング）

②レジリエンス力を高めるレジリエンス行事カードの活用

③自己肯定感の向上をめざす学級指導の時間の充実

(5) 具体的な取組例について

○予習型家庭学習の取組

児童が見通しを持ち、主体的・自律的に学習に向かうために、学年段階や単元のねらいに合わせた予習型家庭学習への取組を進めてきた。

【予習の導入や展開での活用（例）】

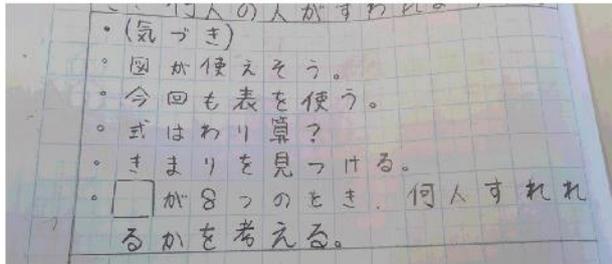
低学年	予習をもとに、教師が問いかけをし、児童の気づきを生かして課題や見通しにつなげる。
中学年	予習をもとに、児童の気づきの発表から、与えられている条件や求めること、前時との違いなどを確認し、本時の課題や見通しにつなげる。自分の理解の状況やねらいに合わせて学び方を選択する。
高学年	あらかじめ教師と確認した課題に対する自分の考えをノート等に予習で書いておき、自分の理解の状況やねらいに合わせて学び方を選択、交流を行う。

【ICTの活用（例）「児童個々の予習の見える化、共有化」】

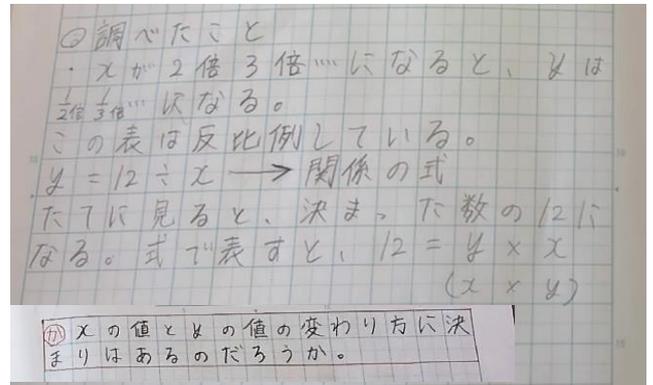


児童は、自分の考え（ノート記述）をタブレットで撮影するなどして、予習した成果物を学習支援アプリを通して提出する。提出されたものは、担任および児童間で共有できるため、担任は児童の理解状況を確認して指導に生かすことができた。児童は他者の考えを確認しながら学び合う対象を選択し、学習を進めることができた。

【予習した気づき（例）】



【予習した自分の考え（例）】



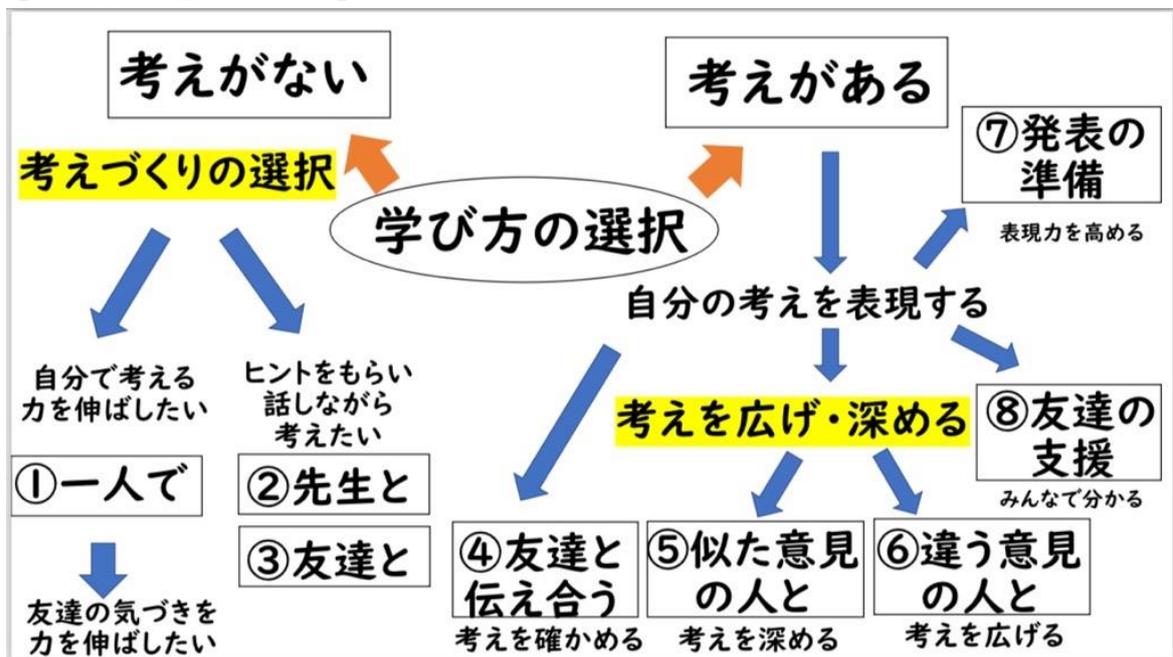
【児童に指導をした気づきの種類（例）（算数科）】

- ①分かっていることは何か（与えられている条件の確認）
- ②求めるものは何か（何を答えるのかゴールの確認）
- ③前時との違いは何か（本時の課題につなげる気づき）
- ④分からないことは何か（個々の課題につながる気づき）
- ⑤使える考えや道具は何か（既習の学びを生かす気づき）
- ⑥何算になるか、どうしたら解けそうか（見通しをもたせる気づき）

○学び方の選択について

児童が学習課題に対しての解決の状態に応じて、学び方を選択する活動を取り入れてきた。

【学び方の選択（例）】



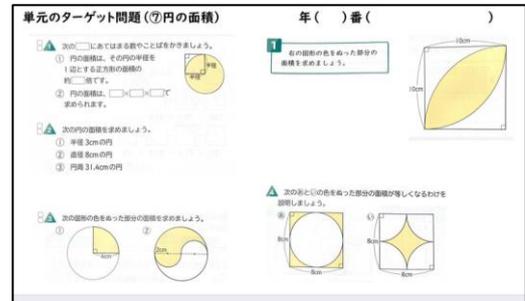
○単元ガイダンスについて

単元のガイダンスにより、「単元の見通し」を持たせ、「単元でつける学びの力」「学びの選択活動」等を意識させ、主体的に学ぶ態度を育ててきた。

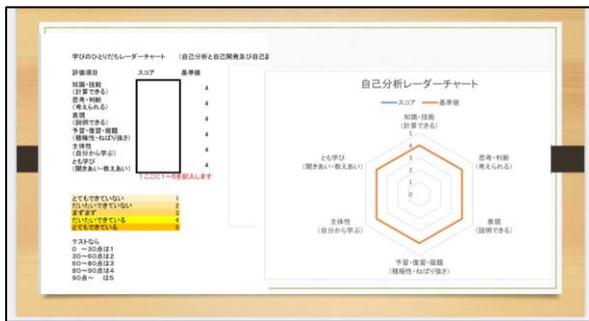
【単元ガイダンスのスライド】



【見通しの工夫（単元のゴール）】



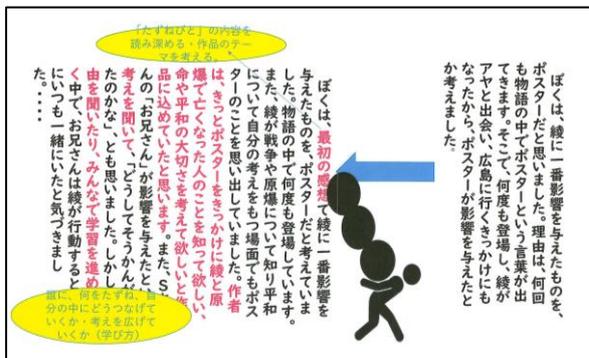
【自己の学び方の分析】



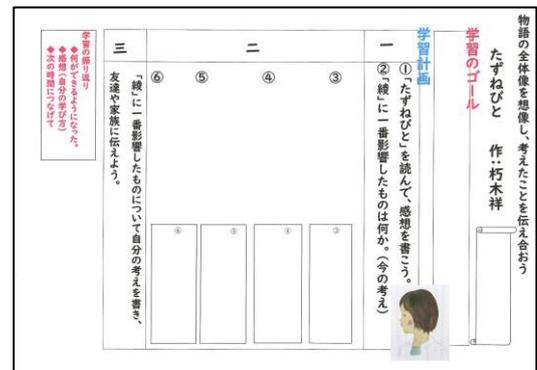
【見通しの工夫（単元計画シート）】



【単元を見通す工夫（国語科）】



【単元計画シート（国語科）】



単元を通して、「主体的・自律的に学ぶ児童」の育成を目指し、実践を図った。単元ガイダンスを行うことで、児童が見通しをもち、前時や次時とのつながりを意識しながら予習できるよう指導を行った。予習を行うことで、児童が気づきや考えをもち、それによって、その時間に身につける力や自己の学びの状況を自覚し、それに合わせた学び方の選択につなげていった。

6 目指す成果【検証方法】

(1) 児童が主体となる授業の実現

児童が意欲的に学び、自分の学びを他の児童と共有し、協働して課題を解決していく姿が見られる授業を展開する。この検証方法として、外部評価を取り入れていく。その他、児童へ各種アンケート、県学力調査（児童質問紙調査結果）により検

証を深めていく。

(2) 学力の向上

県学力調査及び全国学力・学習状況調査の結果の向上を目指す。この検証方法として、毎年度検査の結果から経年変化を捉え、各学年の結果の向上を目指す。

7 研究実施の実際

時 期 (月)	実施内容
5 月	○学校関係者への研究概要のプロポーザルの実施 ○学校関係者による現状の把握のための参観及び調査の実施 ○全国学力・学習状況調査及び本校学力調査の自校分析
6 月～9 月 6 月 2 0 日 6 月 2 4 日 7 月 4 日 7 月 1 1 日 9 月 1 8 日	○授業実践及び研究授業による授業づくり ・熊本大学教員との連携による指導・助言（授業改善） ・熊本大学教員との連携による指導・助言（レジリエンス） ・熊本県天草教育事務所指導主事による指導・助言 ・熊本県立教育センター指導主事による指導・助言 ・上天草市教育委員会指導主事及び指導教諭による指導・助言
1 0 月～1 1 月 1 0 月 1 6 日 1 1 月 1 5 日	○授業実践及び研究授業による授業づくり ・熊本県天草教育事務所指導主事による指導・助言 ・熊本大学教員との連携による指導・助言（授業力向上）
1 2 月 1 2 月 1 8 日 1 2 月 2 5 日	○県学力調査の実施及び自校分析 ・熊本大学教員との連携による指導・助言（レジリエンス） ・授業構想案づくりと検討
1 月	○学力向上検証改善サイクルによる取組の工夫改善への検討
2 月 2 月 7 日	○研究推進状況の第二次評価の実施（兼公開授業の実施） ○研究実践レポートの作成を通じた研究の改善 ・公開授業

8 市町村教育委員会の取組の実際

市教育委員会研究指定校としても指定し、校内研修等での指導・助言を行うとともに、学校からと研究内容、公開授業の在り方等について義務教育課、天草教育事務所と連絡調整を行った。

9 研究の成果【検証方法】

(1) 児童アンケートの結果より

県学力調査の質問項目「主体的な学び及び協働的な学びが実現できているか」及び本校の目指す「自律的な学びができているか」に関する設問を設定し、その結果の学期比較を行った。その結果、児童アンケート全11項目のうち、向上が見られた項目が7項目確認できた。（以下、向上が見られた主な観点）

- ・成果①：主体的な学びへの意識の高まり
- ・成果②：相手意識の高まり及び協働的な学びの深まり
- ・成果③：話し合う活動における自分の考えの深まり
- ・成果④：課題解決への意欲の高まり
- ・成果⑤：学び方を選ぶことへの必要性の向上

「授業づくり」において、「単元のガイダンス」の充実を図り、児童が「単元で何を学ぶのか」「単元を通してどんな力がつくのか」について意識させてきた。また、自己の学びの状況（レーダーチャート化）を自己分析し、「学び方」「高める力」を児童自身が考えられるよう支援してきた。一単位時間の授業の中では、「学び方の選択」を位置づけ、児童自身が誰と、どのように学ぶかを選択する場面を設定してきた。「学び方づくり」については、総合的な学習の時間での「探求的な学び」の実践を通じて、児童が課題意識をもち、「自分から、進んで学ぶ」ことへの経験を重ねてきた。これらの取組により児童の学習への意識と主体性の向上が図られつつあると考える。

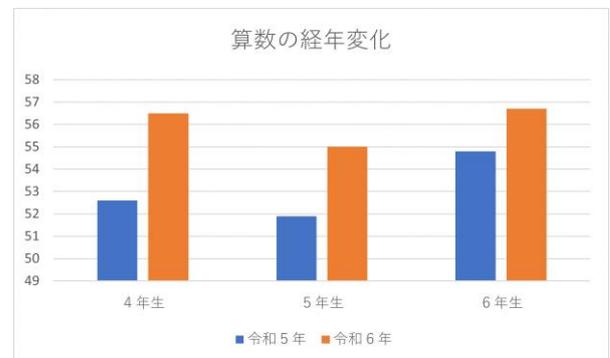
「内面づくり」において、ソーシャルスキルトレーニングにあたる「PKT（パワフルキッズタイム）」の時間を設け、友達と仲良くふれあったり話したりし、互いを認めあう活動を繰り返し行ってきた。これらの取組により、②の「授業で、自分の考えを発表するときは、自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していると思いますか。」の項目の向上につながっていると考える。

(2) 熊本県学力・学習状況調査の結果より

① 算数科の成績の向上

算数科で「4年生8.4ポイント」「5年生7.1ポイント」「6年生8.1ポイント」県平均を上回った。3年生においては、県平均を下回ったものの、4月に行った学力調査からの大幅な伸びが見られた。

同一集団の経年変化について見ると、全国平均を50とする標準スコアについて、算数科で「4年生3.9ポイント」「5年生3.1ポイント」「6年生1.9ポイント」の上昇が見られた。



② 6年生の学力向上

6年生は「算数科で8.1ポイント」「国語科で7.4ポイント」県平均を上回った。経年変化について見ると、「算数科で1.9ポイント」「国語科で1ポイント」の上昇が見られた。

本校では、算数科を中心に「学び方の選択」を取り入れた学習を展開してきた。児童の学習意欲と課題意識が高まり、主体的に学ぶ姿勢が向上した。その結果が基礎学力の向上に結びついたのではないかと考える。「学び方の選択」の学習により、これまで受け身的な学びであった児童においても、友達との学び合いの中で主体的に学ぶことが身に付いてきた。

「単元ガイダンス」の実践として行った「自己分析レーダーチャート」「単元計画

シート」の取組を繰り返し行ってきたことで、児童達は自己の学び方の課題・伸ばしたい力を意識し、学び方のめあてを立て、その振り返りを行ってきた。このことで、自己の学びの在り方について考え、改善する力が伸びてきたものとする。それにより、個々の学びの意識が変わるとともに、学級全体の基礎学力も向上し、そのことで、学級全体の学びのさらなる向上が図られたものとする。

10 研究の課題と今後の展望

(1) 研究の課題

①児童のアンケート結果より

児童アンケートの項目で課題が見られたものは、「グループで話し合う授業は楽しいですか。」「友達意見を聞いて、新しいことに気付いたり、自分の考えが深められたりして、勉強って面白いと思うことがありますか。」である。

②県学力調査より

課題が見られたのは、教科別に見ると「国語」で、特に「読む」の領域である。また、学年別に見ると3年生の学力に課題があった。

(2) 今後の展望

成果のあった「予習を取り入れた授業展開」「学び方の選択」「単元ガイダンス」「レジリエンス力向上の取組」については今後も継続的に実施をしていく予定である。

また、課題のあった「話し合い活動の改善」「国語力の向上」については、これまでの取組の改善や新たな取組が必要と考えられる。さらに、公開授業の参加者等の意見や教師の反省より「国語や算数の教科の深い理解に基づく系統的な指導」「目的意識の高いグループ選択」「発問の工夫」「学習規律」についても、より一層充実を図る必要性を感じているところである。

11 研究成果の普及

研究成果の普及として、公開授業を実施し、熊本県内の小中学校にご案内を差し上げる予定である。特に、上天草市の全小中学校の教職員の参加を仰ぎ、上天草市全体に研究の成果を普及する予定である。